取材・文／松井大助
撮影／石中 仁

定時制高校で全員が授業に参加することを重視 地理の「なぜ」を考えて公民的資質を育む

2022年度より必修科目「地理総合」が始まりましたが、地理専門の教員が不足している、という声もあります。地理への関心が低い生徒もいるなかで、授業をどう形づくればよいでしょうか。奮闘中の先生の実践をご紹介します。

生徒の発言から話を広げることを意識しています

今号の先生

地歴公民科
恒吉佑哉先生

大学卒業後、広島県で高校の教員に。2022年度から始まった「地理総合」の授業については、地理専攻の恒吉先生が軸となり、日本史専攻および世界史専攻の同僚の先生と一緒に授業づくりを進めている。開校当初より勤務する現任校では、生徒指導にも力を入れている。

生徒に対する想い

なぜだろうと考える力をつけ自分も他人も大切にしてほしい

広島みらい創生高校の恒吉佑哉先生は、地理の授業を通して、学習指導要領にもある「公民としての資質・能力」を育みたい、と考えている。グローバル化する国際社会において、自分たちで主体的に社会を形づくっていくような力だ。

「例えば、普段当たり前のように買っているものについて『なぜこの値段か』『なぜこっちが安いのか』を考えてみたりと、物事を『なぜこうなんだろう』という視点からも捉え、自分や社会にとってよりよい判断をできるようになってほしいと思っています。そのための知識や思考力を授業で育みたいです。また、多文化社会のなかで生きていく生徒たちだからこそ、地理に関する『なぜ』を考えるなかで、自分には関係ないと思っていた『世界』との結びつきも感じてほしいと思っています」

地理では世界の地形や気候、産業のことなどを学ぶわけだが、同校の生徒は「身近ではない遠くの事象」になると、自分の生活とのつながりをうまくイメージできず、興味を抱けないことが多いという。それだけに授業では「世界のことを生徒の身近なことと関連づけて示し、興味を引く」ことも目指している。

公民的資質を伸ばす前段階で、生徒に感じている課題もある。同校は、広島県内で従来の定時制・通信制に捉われない新しいタイプの高校として2018年に開校した。門をくぐった生徒のなかには、小中学校では注意されることの多かった生徒や、不登校だった生徒もいて、概して自己肯定感が低かったのだ。また、同校は一人ひとりが自分の計画に合わせて学習時間帯を選択できる教育課程を採っており、学校の出入りは自由で、おかげで伸び伸びと学べるのだが、ともすれば授業を休みがちになる、という課題もあった。

だから恒吉先生は、「全員が授業に参加する」ことも大切にしている。単に出席するという意味ではなく、全員が地理に関する『なぜ？』を考えるような場にすることだ。さらに授業を通して、次の3つのことも意識づけようとしている。

「『自分も他人も大切にする』『時間やルールを守る』『あいさつをする』という3つです。本校ではこれらを『みらいをつくる礎』として掲げているのです」

授業の実践

身近なことから世界のことまでさまざまな問いを生徒が考える

授業では学習内容をまとめたプリントをまず配付する。そのプリントを教室のモニターにも映し、恒吉先生と生徒で対話しながら進行し、要所要所で生徒がプリントの空欄を埋めたり、自由記述欄に自分の考えを書いたりする。授業後は

そのプリントを手持ちのファイルに綴じ、校内のロッカーに保管する。ノートを取るのが苦手な生徒や、ノートを忘れやすい生徒を置き去りにしないための手立てだ。

1年生の地理総合のある日の授業では、「貿易によって結びつく世界」のことを学んだ。恒吉先生が投げかける。「今日の目標は『なぜ日本はEPA・FTAを結ぶのか』を自分で考えていくことです」と。この時点では「語句の意味はまだわからなくていいよ」と断ったうえで、続けて生徒に質問する。「自分が好きな料理は何？ その料理に使用される食材を挙げてみよう」と。次いで、食材別に食料自給率をまとめた表を見ながら、「貿易に頼らずにその料理を作ることができそうか」を各自が調べた。

そうして生活における輸入の必要性を感じたうえで、貿易の話に入る。世界中で自由に貿易できると良いが、国同士の利害が衝突し、輸出入には制限がかかりやすい。その壁を越えるべく、日本は多くの国と2カ国間のEPA（経済連携協定）やFTA（自由貿易協定）を結んでいる。だから私たちは輸入農作物などを安く買うことができ、また、国内で不足する医療現場などで働く人を海外からも呼べるようになった。だが一方で、国内の農業生産者が減少し、立場の弱い外国人労働者が困難を抱える課題も生まれている…。

そこまで話を展開したあとで、恒吉先生が新たな問いを投げかけた。「EPAやFTAを維持しつつ、日本の食料自給率を高めるにはどんな方法が考えられる？」。生徒はおのおのに頭をひねり、図1にあるようなアイデアを出した。恒吉先生が補足する。日本は国土の4分の3が山地で、食料自給率を高めにくい一面もある、と。

最後にまとめとして改めて問う。「なぜEPAやFTAを結ぶのか」。授業で学んだ貿易協定の必要性を、生徒に自分の言葉でまとめてもらうための発問だが、「そこには課題もある」ことを知り、今後も考えてもらうねらいもあった。

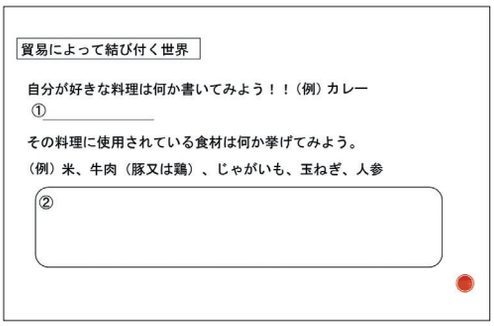
机間指導で一人ひとりと対話 人間関係を築き、思考も促す

始まりこそ身近な話題だが、考えることは国際問題。途中で「難しい」と投げ出しそうになる生徒はいないのだろうか。

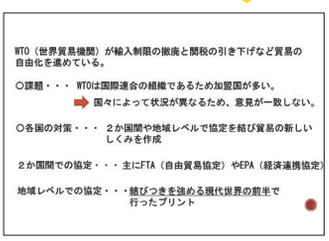
率直に言えば、少なからずいる。だからこそ恒吉先生は、机間指導を重視している。食材の自給率を調べるときも、食料自給率を高める方法を考えるときも、一人ひとりの机を回って生徒の記述に目をとめ、反応し、考えずにやり過ごそうとしている生徒がいれば発破をかける。

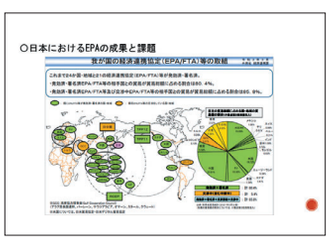
「生徒からはどちらかというと『厳しい先生』と見られているようです。面倒くさいと思われている部分もあるでしょうが、ただ、最終的には生徒は『ちゃんと自分のことを見ているかどうか』で、こちらとの向き合い方を決めていると感じています。関係性ができてくると、ちょっとずつ授業に臨む姿勢が変わってきます」

図1 問いを基に生徒が考える授業一例

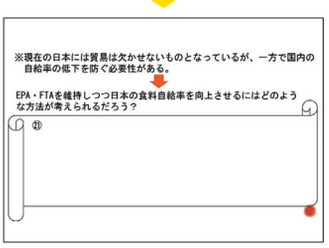


①自分の好きな料理を思い浮かべ、その食材をリストアップ。食材別の自給率の表を参考に、他国との貿易に頼らずに作れるか考える（→輸入の必要性を感じる）





②各国の利害がぶつかり輸出入は制限を受けやすいこと、そのなかで2カ国間のEPA・FTAという貿易協定が生まれたことを学ぶ。その成果（安価な輸入品）や課題（国内の生産者減少）も押さえる



③EPA・FTAを維持しつつ日本の食料自給率を高める方法を考える
【生徒の案】
・みんなが農業をやる。一家に一農。
・小学校や中学校の授業で農業をやる
・野菜やニワトリやブタを育てる
・活用していない土地を農地にする
・全国のニートの人を農業に誘う

まとめ：なぜ日本はEPA・FTAを結ぶのか？

机間指導中。生徒を観察し、いつもとは様子が違うと感じて、体調不良や悩みがないか尋ねることもあれば、楽をしたがっているのを察して、きちんと考えるように促すこともある。

■広島みらい創生高校（広島・市立）

School Data

キャリアデザイン科（総合学科）／2018年創立
生徒数（2021年度）1768人（男子947人・女子821人）
進路状況（2021年度）
大学68人・短大8人・専門学校／各種学校82人
就職35人・その他125人
〒730-0051 広島県広島市中区大手町四丁目4−4
TEL 082-545-1671
URL http://www.miraisousei-h.edu.city.hiroshima.jp

Outline

教育目標に「生徒一人一人の個性を最大限に伸長させ、社会の発展に貢献できる人間性豊かな活力ある人材を育成する」ことを掲げる。定時制と通信制があり、午前・午後・夜間など時間帯によって教育課程が分かれる三部制定時制高校とは違い、午前から夜間まで幅広い時間帯から科目を選択できる「フレキシブル課程」を採っている。小学校や中学校の授業内容を学び直す講座や、広島大学と連携したソーシャルスキルを高めるプログラムも展開。

同僚の先生INTERVIEW

生徒一人ひとりのことを話し合い 授業づくりや関係づくりに生かす

数学科
新田裕樹先生

恒吉先生は、普段から生徒の声に耳を傾け、適切な声かけもされていて、生徒の異変を敏感に察知することができる先生ですね。校務分掌が同じ生徒指導ということもあり、生徒のことでよく情報交換をするんですよ。授業の手法だけを話し込むことはあまりなくて、それよりも「どの生徒の何が気になるか」を話すことが、どうしても多くなります。本校には、いろいろな課題や複雑な事情を抱えた生徒が少なくありません。それだけに、もちろん勉強をがんばれるようにサポートもしますが、まずは生徒一人ひとりの実態を把握し、つまずきや困っていることを理解し、生徒がこちらに壁を感じずに話せるようになること、いわば「本音を引き出すための関係づくり」を大事にしたいのです。

担当教科の数学でも実態把握は欠かせません。小中の学習について「休んでいて学んでいない」ところを押さえるというように。そのうえで、生徒のできることを増やし、個々の成長を後押ししたいと思っています。

HINT&TIPS

1 問いを投げかけて授業参加を促し 引き出した生徒の発言を無駄にしない

学習テーマを問いから始めるほか、教科書にある語句や概念を説明する際も、関連して生徒が知っていることや好きなことを聞き出し、その発言を生かして話を展開、生徒の声を拾うことを大事にしている。的外れな意見が返ってきても否定はせず、「同じように考えた人もいると思う」などと受け止めていく。

2 挙手の促しや机間指導で 生徒が思考する時間を増やす

学習内容に絡めた二択の質問で、生徒に挙手を促し、集計結果が出席人数より少なければ「数え間違えたかな」と再度挙手を促し、全員の参加を粘り強く求める。各生徒がプリントに書いた自分の意見を机間指導で確認し、恒吉先生の感想を返し、本人が手ごたえを感じているなら、そのあとで全員にも共有する。

3 「できた」という実感がもてるように 期限のある提出物や小テストを課す

提出物は必ず期限までに出すように指導。その前提として、余裕のある提出期間を設け、期限前に出せるチャンスも数回作り、期限を守れるように支援している。単元ごとに2時間かけた小テストも実施、まずは自力で解き、次にプリントも見返し、机間指導で恒吉先生もフォローし、できるまで丁寧に取り組む。

4 社会科の他の科目の教材研究も 地理の授業に生かしていく

「自力で理解できるか、共に考えるべきか」などの観点から、学習内容は力を入れる点とそうでない点にメリハリをつける。そのうえで、恒吉先生が幅広い科目の教材研究で学んだ「生徒にも社会に出るうえで知っておいてほしいこと（例えばモノの値段の決まり方）」は、発展的内容でも授業に盛り込んでいる。

授業ができるまで

大学でなぜ型発問を学び 教材研究で引き出しを増やす

恒吉先生の転機は18歳の夏。父親がくも膜下出血で、突然他界したことだった。その父は、息子が教師になることを夢見ていたという。当時まだ進路を決めかねていた恒吉先生は、親孝行という思いも胸に秘めて、得意だった地理で教師になることを決意する。進学したのは広島大学教育学部。ここで「なぜ型発問」の授業スタイルを叩き込まれ、公民的資質を育成する、という思いも培った。

初任校は広島県内の小規模な高校。社会科の教員は自分を含めて二人だけで、「地理の各科目、政治・経済、現代社会と、多数の科目を担当することになり、必死に教材研究に取り組みました」。結果、授業のための引き出しが増えた。

多様な生徒に出会い 授業のあり方を模索する日々

3校目で赴いたのが、開校時から携わった現任校だ。その開校式兼入学式で、恒吉先生は驚かされる。集まった生徒は髪色も服装も十人十色で、式典中も携帯電話をいじったり、おしゃべりを続けたりする者がいたからだ。この状況で授業が成り立つかな、と不安にもなった。実際、1年目は特にやんちゃな生徒の対応に追われ、「不登校経験のある生徒に十分目を配れなかったかもしれない」と振り返る。そこから教員一同で授業を大切にするという意思統一を図り、授業の進め方も工夫し（右上のコラムも参照）、生徒が落ち着いて学べる環境を整えていった。

とはいえ、生徒に対してどう授業を展開するかは「今も悩んでいる」という。

「課題に思うのは、授業の導入の工夫で生徒の興味を引いても、その好奇心を最後までなかなか持続できないことです。生徒は聞き慣れない語句や概念が出てくると、『授業の難易度が急に上がった』と感じるようで、その段階でいったん気持ちが離れ、自分にとって身近に思える話題になるとまた元気になる、ということがあるのです。かといって、語句や概念の説明を後回しにし、付け足すように教えたのでは、余計にその知識は定着せず、自分のものにできなくなるとも感じています」

例えば地理でさまざまな地形を学習する際も、恒吉先生は「あなたたちがこんな土地に住むなら」と自分に引きつけて考えられるように投げかけ、当てはまる地元広島の地形も示す。しかし、高校生の行動範囲は意外とせまい。「自然堤防」について学校のそばを流れる元安川を例に話すと興味をもつが、「盆地」の成り立ちや特徴を県内の該当地域を例に出して話をしても、広島市の平野部に住む生徒が多いため、ピンとこないようで、理解しようとする意欲にも差が出てくるそうだ。

「本校に今いる社会科教員のなかで、学生時代に地理を専攻した者は私一人のみです。それだけに、地理の授業づくりでは、世界史など他の専攻だった同僚の先生の知恵も借りながら、同時に、さまざまな学校で地理を教えてきた先生方の実践からも学んでいけたらと思っています」

電子黒板とプリントを組み合わせた進め方や、質問して全員に挙手を求めるやり方は、現任校に来てから始めたという。

生徒はこう変わる

地理の問いと向き合うなかで世界への関心が高まっていく

授業で関わる生徒のなかには、最初は「単位のために仕方なく受けている」と、やる気ゼロの態度をあからさまに見せる者もいる。けれども、日々の授業の机間指導で一人ひとりと関係性を築いていくと、少なくとも投げかけた問いを「考えてみよう」とはするようになるという。

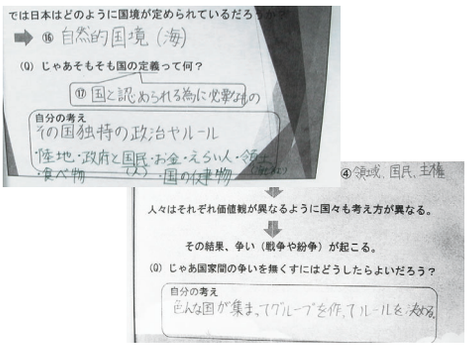
また、問いを考えてみたものの、具体的には何も思い浮かばず、プリントの自由記述欄を埋められない生徒もいる。

「面倒くさがって何も考えずにいるのか、考えたけど書けなかったのかは、授業で毎回声をかけていくと、ある程度見えてくると感じています。書くことで表現力もつけてほしいですが、『なぜだろう』と思考したのなら、私はそのことを前向きに捉えたいと思っているんです。毎授業、個別にやり取りしていくと、そうした生徒も少しずつ書けるようになります」

定期テストで点数が取れるようになって自信をつける生徒や、世界のニュースや環境問題に関心をもつようになる生徒もいる。最近の3年生の地理の授業では、ロシアのウクライナ侵攻という社会情勢を踏まえ、生徒たちが両国の地形や穀物生産量を調べ、この世界や生活への影響を共に考えることもできた。「地理が好きになった」とは言われないが、「恒吉先生の地理で良かった」と言われることはあり、そんなときは恒吉先生としても嬉しい。

もっとも、「教師という仕事はやりがいが見えにくいものでは」とも思っている。

「生徒が卒業を迎えたときや、進路実現を後押しできたときは感慨深いですが、一番あってほしいのは、この先の生徒の人生のどこかで授業で学んだことが役立つことで、それを教員が目にすることはまずないと思うのです。でも、縁あって出会えた生徒たちがいずれはそう思えるようになってほしい。そういうイメージをもって授業に取り組むようにしています」



授業で投げかける問いの一例。「国の定義とは？」「国家間の争いをなくすには」といったことを生徒が自分で考える。

生徒INTERVIEW

考えながら学ぶので、記憶に残るしニュースに目が留まるようになった

――恒吉先生の地理の授業の特徴と言えば何でしょう？

森本「例え話でわかりやすく説明してくれます。モノの値段（原材料費＋輸送費＋機械代＋電気代＋人件費）の話を、バイク好きの男の子にどんな部品があるか聞いて、それを例に話してくれたり。みんなの意見も聞いてくれます。割り箸は環境を害すと思う？ 害さないと思う?とか」

藤川「最初に、生徒が自分で考える時間があるんです。今日だったら好きな料理を書いて、食材の自給率を調べることから始めたり。中学校までは、教科書や地図帳に線を引いてとにかく覚える感じでしたが、今はいろいろ考えながら単語を学んだりするので、楽しいし、覚えやすいです」

森本「前の授業で『国として認められるために必要なこと』も考えたよね。人がいるというのは浮かんだけれど、領域と主権は出なかったので、そうなんだと思いました。小テストでは自分が書いたプリントも見返せるので、だいたいできるようになって、記憶力もあがったと思います」

藤川「恒吉先生は校内ですれ違うと『困っていることはない？』と言ってくれるし、授業中もみんなに声をかけてくれて。中学校のときは先生と話せなかったけれど、今は普通に話せるし、コミュニケーション力もついたかな、と思います」

――地理に関わることで興味をもつようになったことはありますか？

森本「地球温暖化や環境のことです。道路にペットボトルが落ちていると、自分も気になるし、車にも危ないから、拾って捨てるようになりました」

藤川「前までスルーしていたニュースに目が留まるようになりました。コロナの話でWHOとか出てくると、これ習ったなあ、と思うようになりました」

左より、1年生の森本花那さん、藤川春日さん

思い描いている授業のあり方

目指す生徒像

- **授業に参加し、自力で考えることや、発言を受け止めてもらえることを体験し、自信を培う**
- **地理に関する「なぜ」を考えるなかで、世界との結びつきを理解し、その視点をもって、自分や社会にとってよりよい判断をする**

地理の授業

世界との結びつきを感じる	・地理に関する『なぜ』を考えることを通して、生徒に世界との結びつきを感じてもらう ・世界や全国の地形、気候、産業などを、生徒にとって身近な話題と関連づけて学習する
全員が問いを考える	・地理に関する問いを投げかけ、生徒が考える ・机間指導で個々と対話し、さらに思考を深める ・二択の質問で挙手を求め、思考を促すことも ・小テストを丁寧に行い、学んだことを再度考える

他の教育活動や社会とのつながり

- 他の社会科の科目の教材研究で得た知見も地理の授業に活用
- 生徒から聴き出した生活体験や、最新のニュースも学習内容に絡める
- 昼休憩時などに校内を回り、授業と同じように生徒に積極的に声をかける